

# FIRENZE

世界古書店めぐり

所から下ろす役目は、創業者兄弟の一人、兄のグスターヴォが七年前に亡くなってからは、洪水のときはまだ効かった、かれの娘がつとめていようだ。

大洪水のときも、一日休んだだけで翌日から再開に向けて働きつづけたというグスターヴォの訃報をぼくが知ったのは、サリンベーニにはめずらしい色刷り表紙に図版入りのカタログをながめていたときのことだ。ジャコモ・パツラのイラスト「ボツチローニの拳」と題子を表紙にあしらった「未来主義運動」のカタログ



大洪水の記憶をいまでも生々しくつたえる「福音書」

冬のドゥオーモ。左手に折れるとすぐリカーソリ通り

## OPEN AIR MARKET



露店売の権利売買も大変らしい



中央郵便局前の屋台の古本屋

## SALIM



ファシズム期の文芸誌「ソラリア」

の最初に訃報は記されていた。

グスターヴォの弟はいまも健在で、兄の遺したふたりの兄妹といっしょに店に出ている。今回も、長い無沙汰に恐縮しているばかりに、軽く手をふる。甲斐甲斐しく、ぼくが関心を持ちそうな詩や小説の初版本や文芸誌のオリジナルを、幾度も階段を上り下りしながら運んできてくれる。

甥のジョルジョが、手にした紙をふりながら笑顔で近づいてきた。八年前に注文したイタリアのシュールレアリスム関係の書籍リストだった。ぼくのほうは一部がなんとか手に入った時点であきらめて、すっかり忘れていたのに、継続して探してくれているという。美術書と近現代文学を専門に扱うサリンベーニに、日本の顧客が多いのも、こんな律儀さに惹かれてのことかもしれない。

ここで最後ということもあって、しこたま本を買い込んだぼくは、その勢いをもって、共和国広場のわきにある郵便局前の屋台の古本屋めざして歩き出した。別に目当てがあるわけではなかったけれど、雑踏のなかで呼吸するぞつき本の顔でもながめていけば、一冊くらいは、記憶の声を投げかけてくる古書に出会えるかもしれない。そんな予感があった。

ゴツツイーニより四半世紀遅れて、一八七五年からはじまるゴンネツリの歴史は、「マツキアイオーリ」と総称されるフィレンツェ印集派の点描画家たちと創業者ルイーダとの親交によって方向づけられた。店の正面奥の間にいまま版画を中心とする絵画展示場になっていることも、主に扱う書籍が、活版印刷発明当時の一五世紀のインキエナブラや一六世紀の写本であることも、そうした創業期の歴史を反映している。

たまたま左手奥の壁に掛かっている額のほかの手紙をながめていたら、ずつと親切に相手をしてくれていたバルダツツイばかりか、創業者の孫の夫にあたる店主までが寄ってきた目を細めて読んでみると、戦後まもなく発行されたバルチザンからの感謝状だった。なんでも先代の妻が、フィレンツェで市街戦が繰り広げられていたとき、レジスタンス勢力の資料や文書を預かったり、バルチザンをかまったりしたのだという。聞きながら、ネオレアリズモのモノクローム映像が視界のなかでめまぐるしく再生されてゆく。五〇〇年の時を経た古書の記憶にも、いまの時間が確実に流れ込んでいるのだとすれば、ゴンネツリ夫人の気丈さもイ



美術書セクション入口、文学書は右から



20世紀イタリア文学の代表的作品の初版本の数々。カンターナの詩集まである

## BENI



Libreria Salimbeni,  
Via M. Palmieri, 14-16r



『無関心な人々』初版

ンキエナブラのどこかに潜んでいるのかもしれない。

**いまを記憶する古書**

翌朝 数年ぶりで顔を出したサリンペーニ書店の古書たちにも、いまは刻まれていた。

一九六六年二月四日、フィレンツェを襲ったアルノ川の大洪水、といえは思い出すすひとも多いだろう。南にアルノ川を見る、木製の梁の美しいサンタ・クロチエ教会から北へ五分ほど歩いたところにあるサリンペーニの古書も、あの洪水で壊滅的な打撃を被った。そのとき、サリンペーニの一日も早い営業再開を願うイタリア中の古書店から、義援金ならぬ義援本が寄せられたとロヴェルシが語ってくれたことがある。

サリンペーニにはいまも、大洪水を生きた証とした書物が一冊、大切にしまわれている。すつかり変形し黒ずんだ書物が『福音書』であることは、よほど目を凝らさなければわからない。汗菌に手をふれようものなら、ぼろぼろ欠けてしまいうで、ページを繰ることなどできはしない。

そのぼろぼろの生き証人を、両の掌にそつと載せて、時折二階の事務